

カトリック

広島教区報

8月
平和行事に六百人

被爆60年

八月五日と六日の広島教区平和行事は、被爆六十年の今年、北海道から九州まで全国から例年になく多くの参加者を迎え多彩な行事を行った。(二面、三面) また、若者たちも「平和を考えるつどい」を企画運営し、積極的に参加した。(六面)

高見大司教
非暴力による平和構築を訴える

五日十九時三十分からの「平和祈願ミサ」では、高見三明

大司教(長崎大司教区)が

説教を行った。大司教は、ことしの「日本カトリック平和旬間」にあたり、日



高見大司教

No. 62

カトリック
広島司教区発行責任者
澤野耕司神父編集者
山口道晴神父広島市中区細町4-42
広島司教区第1内
TEL (082) 221-6017

本カトリック司教団が出した平和メッセージ「非暴力による平和への道」も、今こそ預言者としての役割を、に則りながら、まず人間の尊厳を前提とする個人レベルの平和の道を示した。そして、国際レベルにおいては、武器と武力を放棄し、非暴力による平和の道を示し、「愛」を武器とするキリスト者の歩みを訴えた。

〈日米女子修道会

平和の誓いを発表〉

全米女子修道会総長菅区長会と日本カトリック女子修道会総長菅区長会はヒロシマ・長崎被爆六十周年に当たり、「平和の誓い」を作成し、六日の「広島原爆犠牲者追悼ミサ」の中で、アイヒテン修道女(リトル・フォールズのフランシスコ姉妹会)と弘田鎮枝修道女(ベリス・メルセス宣教修道女会)が読み上げた。

ヒロシマ長崎六十年

全米女子修道会総長菅区長会

平和の誓い(抜粋) 日本カトリック女子修道会

総長菅区長会

日本

「第二次世界大戦終結後六十年にあたる二〇〇五年八月、米国と日本の女子修道会の代表が、広島と長崎に集うことになりました。私たちは六十年前の広島・長崎を思い起こし、奉獻した女性として、日米の修道女がすべての暴力に対して「否」と言い、戦争に反対し平和を創り出す努力を連帯して行く決意をここに表明します。……」

1. 私たちはこれからも日本国憲法九条「戦争の放棄」を守りぬく努力をしていきます。
2. 「非武装」「非暴力」というイエスのやり方を実践し、対話と信頼の構築を通して平和を築く努力をします。
3. 人々が差別され、排除され、傷つけられ、自然資源が破壊される構造的暴力に対して抵抗し、人間の尊厳、人権、平等と持続的開発が、政治、経済、社会のあり方において優先されるようにそれぞれの場で働きます。
4. 不戦の誓いを新たに、無防備宣言運動を支持します。

米国

「……。アメリカ合衆国の市民として、また米国と世界中で奉仕する女子修道会の責任者として、私たちの国が原子爆弾をこの国の市民の上に投下した事実を悲しみをもって厳粛に受け止めます。どれほど辛くても、私たちはこの記憶を生かし続けます。……。米国政府は政治的操作と、軍事力に依存しながら、すべての人々の平和と自由という究極の目的に害を及ぼしています。……」

- これから五年間次のように生きることを誓います。
- * 私たちの行動すべてが、理想の祈りを土台とする
 - * 全被造物との正しいかわりに根ざして生きる
 - * 平和と和解を目指す誠実で丁寧な対話を実践する
 - * 修道会、教会、社会において変革をもたらす者となる危険を辞さない
 - * 貧しくされている者特に女性と子どもの側に立つ、希望に満ちた未来を創るために協働する

ピースウォーク

しずかに歩いてつかあさい、広島は大きな墓場ですけん。(水野潤一)

聖堂前でヒロシマについて学び祈った後、神父を含め十八名の参加者と六名の案内担当者は世界平和記念聖堂から比治山、平和公園に至る約五キロの道程を徒歩巡礼。被爆経験のある高齢の方と子どもたち、または同世代の者同士など、自然に小さなグループをつくり、各々の経験や平和への思いを語り合った。

今年初めて岡山地区が案内を担当し、時には地元からの参加者に教えてもらいながら説明を行った。

比治山・旧陸軍墓地の高台から南の市街地を眺め、戦争につき進んだ当時の日本、軍都広島、そしてヒロシマの姿を思い描き、平和

を創るために行動し、折ることの大切さを考える一日となった。

被爆者証言

マリアホールを主会場に、被爆者の加藤良夫さんと服部節子さん、他の四つの分會場で四名の方による証言を行った。

主会場では、戦時下の青景(軍都広島)について、原爆投下時には一瞬にして火傷や負傷をしたこと、倒壊した家の中から助けを求めた悲鳴や「熱いよ!」と言いついに飛び込みなくなった人、「水を水を」と叫びながら火ぶくれの被災者が郊外に避難する様子、燃えあがる市街地の惨状の事。一発の原爆で二十数万人が亡くなった事の赤裸々な証言に、約百二十名が熱心に耳を傾けた。分會場でもそれぞれ約二十名の証言を聞いた。

被爆60年



平和行進



聖堂案内



被爆者証言 (マリアホール)

原爆遺跡めぐり

二年前から被爆者証言後にピースウォークができなかつたという要望があり、本年はその要望に応じて実施。例年二十名程度であったが、小学生から青年までの百二十名以上という予想外の多くの参加者となった。

コースは、臨時帝国議會跡、憲兵隊中国司令部跡、帝国銀

世界平和記念聖堂案内

五十数名が参加し、四班に分かれ、七名の案内人で聖堂の説明が行われた。

参加者の感想には「河度も来てくれるけれど、詳しく見学できたのは初めてでよかった」、「広島市の平和行事のすばらしさに感心した」、「なぜ平和記念聖堂が世界平和の基、礎となつていけるかがよくわかった」、「ラサール神父の

行、袋町小学校、旧日銀広島支店を経て平和記念公園。広島城域にある十一連隊、大本営、通信隊地下壕跡は参加者多数の上、十七時までに平和記念公園に着かなければならないので、省かざるをえなかつた。今後の課題は、未来に責任を担う広島教区外からの巡礼者が多い現状に対して、彼らを受け入れる態勢作りの整備である。

祈りの深さ、日本を愛しておられる事がよくわかった、などがあり、案内を担当した者も非常に満足した出会いとなり、来年の再会を約束していた。

今年初めて英語と中国語が可能の方が案内人に加わったために、台湾から来られたシスター(メルセス会)数名に対して中国語で聖堂について説明が行われた。

被爆六十年となる本年の広島教区平和行事には、例年にも増して多くの方が、国内はもとより、遠く諸外国からも参加した。諸行事をとおして、私たちは平和について体験し、味わい、考え、そして行動する決意を新たにしたい。

来賓としてローマ教皇庁大使館アルベルト・ボッターリ・デ・

2005 広島教区 平和行事

祈りの集い

午後六時から平和公園原爆供養塔前で「祈りの集い」が行われた。聖歌を歌った後で、栗原貞子の言葉（「ヒロシマ」といえば「ああヒロシマ」とやさしく返ってくるためには、わたくしたちは汚れた手を清めねばならない。」）、ヨハネ・パウロ二世の「平和アピール」、ヨハネ福音書二十章十九節、暗佐久神父の「屋言葉」、シラク大統領の言葉（戦争は一人でもできるが、平和は一人ではできない。）が朗読された。

平和行進

「祈りのつどい」の後、世界平和記念聖堂まで、広島市中心部の商店街（本通）を五百人以上が聖歌を歌いながら行進した。沿道の市民の方々にも、教会による

平和の誓いのパワーが通じたのではないか。例年よりも参加者が多く、行列が長くなり、警備の方も大変な様子だった。感謝。

平和祈願ミサ

平和行進を終え、平和を希求する溢れんばかりのパワーは、平和祈願ミサにつながる。

別記来賓の他、池長大阪大司教、高見長崎大司教、谷さいたま司教、野村名古屋司教、大塚京都司教、松浦大阪司教、満部高松司教は、三末広島司教および約四十名の司祭団とともに、荘厳なミサ聖祭を行った。

広島教区と姉妹教区を結んでいる釜山教区の李信徒会長が第一朗読を、福音朗読はインファンタ教区のアントニオ神父が自国語で読んだ。説教では、高見大司教が一人ひとり平和のため



李正雨さんの朗読



広島原爆犠牲者追悼ミサ



広島原爆犠牲者追悼ミサ



長崎原爆犠牲者追悼ミサ

カステッロ教皇大使とレオン・カレンガ参事官、韓国釜山教区から鄭明祚司教、尹景哲神父、信徒会長の李正雨さん、フィリピンのインファンタ教区からはアントニオ・エバンジェリオ神父と信徒代表のジョセフィーヌ・P・テナさんが平和祈願ミサ他に参列した。

に働くよう訴えた。

ミサ終了後は、「夜の祈り」として、歌や朗読が深夜まで続いた。

広島原爆犠牲者追悼ミサ

被爆六十年のこの日、私たちはまさにヒロシマの原点に立ち返って、原爆犠牲者追悼と恒久平和を祈った。この記念碑的な年に、

米国と日本の女子修道会の代表が広島と長崎で集うことになり、シスターベアトリス・アイヒテン（リトル・フォールスのフランシスコ姉妹会）とシスター広田鎮枝（ベリス・メルセス宣教師修道女会）はミサにおいて、平和の誓いを行った。

二人のシスターはイエスの福音的勧告に従う女性として、過去と現在を見つめ、いのちを脅かすあらゆる暴力に対して「否」と言う「平

和の誓い」を発表した。

エリザベト音楽大学の学生は朗読、管楽器アンサンブル、独唱、バイブオルガンの演奏で奉仕し、荘厳な祈りの雰囲気を感じさせた。平和への思いが、これらの若者、平和行事および平和学習のために広島を訪問する多くの青少年をとおり、次の世代に受け継がれることを祈りたい。

長崎原爆犠牲者追悼ミサ

八月九日、午前十一時から平和記念聖堂地下聖堂で、齋藤神父、バンガンスベルグ神父、木村神父によりミサが捧げられ、改めて平和を心に誓った。



第1回 キリスト者平和の祈り



八月六日午後、世界平和記念聖堂で、プロテスタントとカトリック合同の平和を祈る集

会が開かれた。被爆を体験した牧師のメッセージ、ハンドベル、パイプオルガン、チェロ、琴などによりバッハの宗教曲や賛美歌が演奏され、荘厳な雰囲気包まれ心をひとつにして平和のために働く決意を新たにされた。被爆六十周年を機に、これから毎年八月六日には、広島のカトリック者が平和の実現を願って、必ず熱い祈りの集いを開くことを誓った。

平和をつくることも
交流プロジェクト

八月二日から七日まで、

イスラエル六名、パレスチナ六名、日本七名の高校生たちが、高校生を中心とした広島のスタッフと共に「あなたにとつ



平和公園で

被害を受容し、リベンジ(報復)することなく、ゆるしと和解の上に今の広島町の復興がある。これは今

てヒロシマとは」「ヒロシマから何を学ぶか」をメインテーマに、精力的に活動した。

「ヒロシマとは希望だ」。

も紛争まっただ中にあるイスラエルとパレスチナへのメッセージとなった。

二年前に一家で車で移動中、テロリストと誤認され

被爆60周年・長崎平和巡礼



島原教会聖堂で

八月八日、司祭九名、神学生三名を含む三十五名はバスで長崎に向かった。約六時

間後長崎に到着した一行は、十九時から原爆投下中心公園での「諸宗教合同慰霊祭」に参加。カトリック合唱団によるレクイエムが流れる中、高校生の持つトーチが祭壇後方に立てられ、地上にも同心円状に並べられたカップに灯火がともされ、七万五千人余りの原爆殉難者の慰霊が敢かに行われた。

八月九日は島原半島に巡礼。雲仙登山口の雲仙教会で祈った後、煮えたぎる泥湯に投げ込まれ多くの殉教者を出した雲仙地獄の遊歩道を歩き、キリシタン殉教者に思いを馳せる。次に訪れた島原教会は「島原半島殉教者記念聖堂」として一九九七年に献堂され、「真福八端」を理念とした

八月十日、西坂教会でのミサは、三末司教様と九名の司祭の共同司式で行われ、イエズス会の結城神父様が二十六聖人について説教してくださった。ミサ後、外海の黒崎教会、遠藤周作文学館を経て、三末司教様が一年間司牧されていた出津教会(ド・ロ神父設計施工)へ。希望者はド・ロ神父記念館で、百年以上の時を経て未だに美しい響きを奏でるオルガン演奏を聞きながら展示品を見、神父様の偉業に触れ、多くの恵みに感謝しながら長崎を後にした。



たいまつ行列先頭

八角形の聖堂の外壁に山の上の説教「幸いな人」の聖句が書かれています。



たいまつ行列出発前

姉妹教区の さらなる交流を 願って

八月四日、姉妹緑組をして五年目になるフィリピン人のインファンタ教区、韓国の釜山教区、広島教区の担当者会議が行われた。

今回は特に昨年末に台風で大きな被害を受けたインファンタの問題が取り上げられ、今後とも広島教区と釜山教区が援助をしたい旨を表明した。



左 中央 右
三末 萬 實 司 教 (広島)
郎 明 許 司 教 (釜山)
ティロ一ナ 司 教 (インファンタ)

また、共通の「姉妹教区の日」を五月の第二日曜日と設定し、そのためのポスターを広島教区が三カ国語で準備することになった。姉妹教区のロゴマークはインファンタ教区が教区内で募集し、他の両教区で選考して今年のクリスマス頃に

決定することになった。さらに、釜山教区からは、他の教区から釜山大学への留学生の受け入れの可能性があることが出された。また各種の団体や職業の信徒名簿が回覧され、積極的な交流の可能性が伝えられた。

最後にインファンタ教区からはこれまでの支援に対する感謝が述べられ、釜山教区からは事務局メンバーや信徒と出会えて今後の交流の拡大に大いに力になることが述べられた。

その他、広島教区と釜山教区の青年や神学生のスポーツ(サッカー)交流の準備をヨハネ神父が担当

された。次回の会議は来年の七月二十二日から二十七日頃、インファンタ教区でと決定された。

若者たちの インファンタ訪問

八月十六日から二十四日、三教区交流委員会主催のインファンタ訪問に荻神父、ジェリー神父、野中神父、大人信徒一人、中高大学生七人が参加した。

現地では、台風による流木を利用した堆肥作りを手伝い、多くの人との交流をもった。彼らは折りによって力づけられること、身内の人や生活の手段である船や水田などをなくした人々の精神的、物的困難を支え合う必要性を語ってくれた。



流木のチップと家畜の糞で堆肥を作る作業

その他、水の上にできたスラムや、それとは別世界のシヨッピングセンターを訪ねたり、いろいろな人と出会い交流と体験を深めた。

カトリックの雑誌 『あけぼの』

①

パウロ女子修道会は社会的コミュニケーション手段による福音宣教のためにイタリアで誕生した修道会です。創立者・福者アルベリオーネ神父は、毎月、忘れたころに神からのメッセージが届くようにと、定期刊行物の発行を大切にされ、五十六年、月刊誌「あけぼの」が創刊されました。この「あけぼの」は聖母マリアにささげられ、真理の光イエスを人々に差し出す母マリアのように、女性の自立を促してきました。

そして迎える死までの人の一生を、真剣に考えようとしています。世界平和の希望、キリストの教えを今の時代に実現する「憲法九条」、平和憲法の存続さえ、危うくなった戦後六十年の今年、「あけぼの」は、特集や連載で「平和」のテーマをとりあげてきました。

私たちはとりまく社会は、価値観が多様化し、いのちが軽んじられ、大切にすべきものが分りづらくなりました。私たち一人ひとりのうちに呼びかけられるキリストの招き、励め、導きに耳を傾ける余裕も勇気も危うくなっています。

また創刊五十周年を迎える記念記事として、混沌とした今の時代にキリストに根ざした本質的な生き方を考えたいと思ひ、修道生活の真髄に触れる取材を、作家・木崎さと子氏にお願いして、日本各地と、日本からアジアに支部修道院を開いた中から二修道会をカンボジア、タイに訪問し、二年間の連載を続けています。

女性のメディア専門家が「あけぼの」の表紙を見ておっしゃいました。「生きている花を、そのいのちを込めて油絵で描く。写真やコンピュータグラフィックの多い現代のなかで、このいのちのかよ

う表紙から始まる雑誌は貴重ですね」と。表紙は女子パウロ会のシスターが描いています。

そうしたなかで「あけぼの」は、いのちをほぐくみ、育てていく視点を中心に、誕生から成長、

そして迎える死までの人の一生を、真剣に考えようとしています。

記念誌完成



本誌は、八月の平和行事を前に完成し発行された。三末篤實司教が「はじめに」で述べているように、原爆ドームが「人間の営み

の負の遺産」であるならば、世界平和記念聖堂は「ゆるぎない平和を作り出している」という、(人類の)積極的な意思の表明である。」

まず前半でたくさん写真と図解で聖堂の各部の由来とシンボルを紹介し、後半では第二次世界大戦までの広島教会の歴史、原爆投下から聖堂建設準備、着工、完成までの経緯を示す。また「資料」として、聖堂建築の概要、歩みの年表、そしてナースリック神父の証言が収められている。

記念聖堂を知るために、平和を願う祈る心を新たにするために座右の書にした記念誌、すばらしい労作である。

自分達の意思で日本に来たわけではない滞日外国籍の子供たち、異国の地で、ことばが充分でない親から生まれた子供たち、彼らは、今どんな思いで生きているのだろうか。

表現したくても出来ず、言い表そうと思っても言葉が見つからず、モタモタしていると取り残される。イライラして周りに当り散らすと、行儀が悪い、あんたなんか国へ帰れ！と言われる。泣き寝入りすれば心の傷となる。それが積もり積もってうつ病となるか、横道に反れる。横道に反れるとお金が必要。引つたり、万引き、窃盗など次々にヤツテシマウ。

8.6

若者主催 「平和を考える集い」



左から
Sr. 田原 弘子
Sr. 松浦 美津子
Bp. トリス

八月六日の原爆犠牲者追悼ミサ後、青年主催で「平和を考える集い」を開催し、年代を越えて、約一二〇名が参加。松浦信司司教(大阪教区)とシスター・ベアトリス(全米修道女会)の

講演の後、グループに分かれて話し合い、「これから私が平和のためにできること」「平和を築く十戒」をたてた。

松浦司教は、「イラクで苦しんでいる子ども達には、日本がアメリカに追従することを許した私たちにも責任がある。そんな「ぼんやり病」を克服しよう。」と語った。シスター・ベアトリスは、「心を閉ざし、

暴力的になるときこそ、自分の心に聞き、真実を見つめることが大切」と語った。グループでの分かち合いでは、ヒロシマで感じたことや日頃の平和への思いを語り合い、短い時間でも深い話ができた。



参加者の分かち合い

狭間にいる子供たち

J-CARM 広島

来春セミナー開催

私がかわついていたブラジルの家族は、「日本で子供の教育はできない」と言って帰国し、リーダーをしていたフィリピンのある母親も「日本で子供の教育は難しい」と言ってフィリピンへ引き上げた。

卵が先か、鶏が先か、特効薬はないのか、息がなければ子供たちは直ぐに大きくなってしまい、そうなるともう遅いなどなど、何から手をつけてよいのか判らない現実がある。

この現実の中で J-CARM (日本難民移住者移動者委員会) 広島が、大阪管区での相当として、二〇〇六年二月二十五日(土)、岡山カトリック教会でセミナーを開催される。テーマは「子供とどうかわればいいのか」(仮称)。対象は両親、教職員、一般、信徒、司祭、修道者、教会のリーダーなど。この紙面を借りて、ご案内いたします。皆様のたくさんの方の参加をお待ちしております。

J-CARM 広島 Sr. 春日 圭子

大変！けど、良かった！

世界青年大会に百万人以上



教皇ベネディクト16世

八月十五日から二十一日まで、ドイツ・ケルンで世界青年大会(WYD)が開かれ、

日本から三百一人が、広島教区からは二十一人が参加。大会では、世界中の多くの若者との交流、信仰養成講座、新教皇とのミサなどで信仰を深め合った。



日本からの参加者

〔参加者の声〕

「多少の混乱は予想していたが、実際の体験は驚きの連続。列車に乗ろうとしても、なかなかホームにたどり着けない。到着した

列車も既に満員。重量オーバーで故障。食事がもう残っていない。

けれども、皆譲り合って探め事も起こらず、信仰のすばらしさを感じた。」



ミサ用特設ステージ

「世界中から参加した仲間と共にミサにあずかり、国や言葉が違っても神様に向かって一つになって祈れるという確信をもち、大きな喜びを感じた。」



ミサ会場での野宿

「各国の旗を掲げ、野宿の装備を背負い、何十万人という若者たちが歩く。私も

その中の一人として祈りながら歩いていく。普段の生活では意識できなかった神さまが、すぐ傍に皆の内にあられる気がした。」

「絆」を深め合う 青少年合同合宿で

八月十三日から十五日まで、鞆町教会と聖母幼稚園で、十八人が参加して青少年合宿が行われた。広島教区の今年のテーマ「信仰イキイキ、明日の教会」ひとつのこころ、ひとつのからだ」にちなんで合宿のテーマも「絆」。

十五日のカテドラルでの聖母被昇天のミサの典礼を引き受け、そのための聖書の勉強、歌の練習にも取り組んだ。当初、ミサの福音

練成会で手作りミサ



八月二十五日から二十七日、岡山教会で教区練成会が行われ、四十七人の小学生が参加した。ミサの流れや意味、その起源などについて学んだ。そして、種なしパン、十字架、祭壇、ストラ、奉納物を自分たちで作成し、皆で手作りミサを捧げた。

朗読に合わせてパントマイム劇をする予定であったが、急遽変更して平和を訴える歌を作詞作曲。ミサの中で前に出て全員で歌った。

広島教区 高校生キャンプ

八月十六日と十七日に、廿日市の飯野山ダムにある広島学院キャンプ場で、来春の中プロのスタッフとなる広島



肉よりおしゃべり(?)

地区の高校生十三人が合宿を行った。中プロの中で会議の進め方などを学んだり、バーベキュー、キャンプファイヤーで楽しんだ。

訃報



メタルド丸川悟郎神父

メタルド丸川悟郎神父が、七月十一日、山口労災病院で帰天。享年八十歳。師は一九二五年に東京で生まれ、二十二才のときに細江教会で受洗。一九五六年に細江教会で叙階された後、細江教会と観音町教会で助任司祭、一九六二年に司教館での教区会計になり、同時に一九九二年まで司教総代理を務めた。その間、興教会、松江教会、観音町教会、向原教会、岡山教会の主任司祭を務めた。その後、廿日市インマヌエルホーム、司教館、三條教会、小野田司祭の家で療養生活を送っていた。

教区代表者会議

≪三つのテーマ≫

十一月の教区代表者会議に向けて地区ごとのまとめの最終段階になり、実行委員会より担当地区とテーマ案が出された。「平和」を広島地区、「きょうどう」を岡山鳥取地区、「養成」を山口鳥根地区。今後テーマはさらに、「課題」→「分

析」→「実践」→「展望」という流れでまとめられる予定。

≪代表者会議以降の流れ≫

さらに代表者会議以降の流れが示された。①会議で出された方向性を地区宣教師牧評議会に報告し了承を得る。②十二月十一日の教区宣教師牧評議会で中間報告。③来年三月教区宣教師牧評議会最終的まとめ。④来年の復活祭に司教によ

る宣言を出す。

≪短詩型文学募集≫

短詩型文学締め切りを九月末まで延期する。

岡山 青年キャンプのお誘い

九月十七日から十九日、大川町南自然の家で。問い合わせは、山本厚治まで。〇九〇―二八三七―五三〇三

インファンタより みなさまに感謝

今年三月の中プロの中で集まった援助金百二十ドルは、ナカル・カルメル高校に届けた。

また、教会や個人からいただいた援助金も、インファンタ・カルメルスクーラやインファンタ教区に渡し、領収書をもって帰った。(Pr. 荻)



本部事務局というところ

教区本部事務局長

西江 和司 神父

今年四月一日から教区の本部署事務局というところで働くことになりました。

仕事上一般社会人と同じ境遇に置かれているということを考えれば「働く」という言葉は今の仕事には正に相応しいので

すが、司祭であることを考えた時、果たしてこのことがいいのかどうかやはり考えざるをえません。

司祭にとつて働くことが社会で問われるような量的なものであつてはならないと思つています。

この現状をどのように見つめていけばいいのか、仕事もせず考えている最中です。

そういう意味で天真爛漫に生きておられる、いや、

失礼、活動されておられる

神父さん等を見ると、やはり「うらやましいなあ」と思つてしまいます。尤も、

最近では社会福祉法人関係で働いておられる神父さん方がいて、お話を聞くと更に過酷な状況に置かれているようで、逆に「よくやるなあ」と感心してしまうのですが。

そんな私は、日頃事務局長室という部屋に籠もつて居るのですが、この部屋で仕事をすると窒息しそうな感じがします。しかし同時になぜかこの分厚い壁に自分を守られているとも感じ

られるのです。丁度大戦

末期激しい砲弾を浴びながら、地下壕に籠もつて勝てもしない戦を指揮

していた軍司令本部にいるような感じは、狂わなかつた前任者達には感心しています。

左手に会議、右手に会計(参照:左手にコラーン、右手に剣)で送る日々が果たして司祭職をしていると言えるのか、自問自答の毎日です。

任命中に突然自分が大本営発表のようなことをしてしまわないことを願つて……。

My Bible



(定価八五〇円)

新刊紹介

この本は一人の信徒が「御言葉」に支えられた生活に感謝して生まれた本です。



日米ともに台風による甚大な被害を受けた。日本の年配の被災者の「自然のことで仕方がない、頑張りませぬ」と微笑さず浮かべた気丈な答えに、私は感心した。しかしながら自然の業に対しては、耐えるしかない。

戦争と平和は違う。完全に人間の仕業だ。平和行事をとおして、平和な世界の建設に貢献することを毎年誓っている。この誓いは平和句間終了をもって終わらない。常に意識し、行動し続けねばならない。そして協力する友を得ること、パワーは倍増となる。(K)



(47)